

保育者の予想を上回る出来事に対する環境の再構成 —質問紙調査法による自由記述から 保育者の実践知を解読する試み—

堅田弘行*

要約

本稿は、保育者が環境の再構成を行わなければならないような保育者の予想を上回る子どもの姿を目の当たりにした時に、どのような判断に基づき、環境の再構成が行われているのかを明らかにすることを目的としている。島根県の公立の保育所、幼稚園、認定こども園で働く保育者を対象として質問紙調査法による自由記述の回答から計量テキスト分析を行った。予想を超える出来事について、「想定していた用途とは異なる方法での遊び・活動の発見」、「保育者の予想を超えた子どもの姿」、その子どもの姿を土台とした「保育者の予想を超えた遊びや活動の発展」、「保育者の予想を超えた遊びや活動の収束」、天気の変化等による「自然現象に伴う偶然の発見」の5つに分類し、それぞれの出来事に対する対応やその時の判断について、保育者は子どもの楽しむ気持ちを第一に考えており、そこには保育者の意図が入ることは少ないと結論づけた。ただ、結果として最初に環境を構成する際に、保育者の意図を明確にすることで、その場面で遭遇した瞬間にそのねらいに少しでも近づけようと、それでいて子どもには悟られないように完全に裏方の役割をこなすことができると考えた。

キーワード：環境を通して行う教育・環境構成・保育者・計量分析

2020年10月5日受理

はじめに

幼児教育は「環境を通して行う教育」を基本としている。そこでは、自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導が展開されている。平成29年3月告示の幼稚園教育要領では、幼児教育段階における資質・能力として「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう人間性等」といった3つの柱が示された。これらは3歳以上の幼児教育において遊びや生活を通じて一体的に育まれるものとされている。「知識及び技能の基礎」は、「遊びや生活の

中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気づいたり、何が分かったり、何ができるようになるのか」、「思考力・判断力・表現力の基礎」は「遊びや生活の中で、気づいたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか」、「学びに向かう力・人間性等」は「心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか」である¹⁾。このように、現在の幼稚園教育においては、幼児自らが環境に働きかけ、そこで得た体験に対し、保育者が適切な援助を行うことが求められる。

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：堅田弘行

〒690-0823 島根県松江市川津町 4280

大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

E-mail:h.katata@kenko-fukushi.ac.jp

幼児教育における環境にはありのままの自然も含まれるが、多くの場合、幼稚園や認定こども園等で保育者によって予め構成された環境に対し、子どもが働きかけを行うことが期待される。保育者は子どもの動きを予測して環境を構成し、子どもの活動を援助するが、時には予想を超える出来事も起こり得るものである。伊藤(2019)は保育における環境を現象学の視点から捉え、保育者の言動や立ち振る舞いなどの人的環境、身近な自然や植物、動物、季節などの自然環境、モノそのものやその性質、形などの物的環境、行事や地域との関わりなどの社会環境の他、その環境に関わる際に子どもがどのように感じるかといった感性が保育における環境を考える上で重要であると述べている²⁾。保育においては近年、注目されている理論の一つとして、アフォーダンス理論がある。アフォーダンスは、環境が動物に対して与える行為の可能性のことである。遊びの中で盛んに登場する「水」は「触れる」、「混ぜる」、「すくう」、「凍らせる」といった様々な行為をアフォードしている。子どもが環境に働きかける中で、どのようなアフォードをするか、時に保育者の予測を上回る時がある。その際、保育者は予め設定した課題を再構成することが求められる。

保育者がどのように環境を再構成するのかについては、その場の瞬時の判断が要求され、それなりの経験が求められると考えられる。一方で、それは単なる経験としてではなくそう判断するエビデンスが存在すると考えられる。本論文では、保育者の環境の再構成がどのように展開されているのかを明らかにし、実践知として積み上げられた行為を読み解くものである。

1. 先行研究の整理

1) 保育における環境

原子(2014)は「環境を通した教育」を実践するためには、子ども同士が触れ合う機会をもたせること、遊具などの環境を整えること、動植物の飼育栽培活動を通して自然を取り入れること、園外保育などによって豊かな自然や身近な社会に触れさせることを挙げている³⁾。長江・伊藤(2018)は、子どもの育ちを支える環境構成のあり方について検討を行い、

「子どもたちが環境に関わりながら豊かに経験を重ねていくには、まずは安心して過ごせる環境と自由に様々な物に触れたり選択したりできる環境を整えておくことや、時間や空間、仲間などの状況を構成していくことが必要である」と述べている⁴⁾。

2) 保育者の専門性としての環境構成

田中(2020)は、一つの幼稚園を対象として日々の保育における遊びや子どもの姿を記録する調査を行い、幼児が「やってみよう」と思うような環境づくりの工夫と保育者の援助のあり方を分析している。その中で田中は、遊びを「保育者の意図が優位な遊び」と「子ども主体性が優位な遊び」に分け、それぞれにおいて「保育者の意図性をもった環境構成」と「幼児とともに創りあげていく環境構成」があると示している⁵⁾。この遊びがどのような状況にあるのかについて竹内(2017)は、保育者のあり方、立ち位置によっていかように変容する可能性があるとしており、保育者が子どもと共に遊びを楽しみながら、その姿を見つめ続ける中で、遊びを構成していく必要があると述べている⁶⁾。

飯野(2020)は積雪期における園庭の環境構成について質問紙調査によって考察を行っている。飯野によると、どのような自然現象に見舞われようとも環境構成の難しさは存在しており、その環境ならではの工夫を凝らそうとする保育士の姿があったと述べている。また、あくまでも推測の域を出ないものの、どのような環境構成をするのかについては、保育士の幼少期における経験が影響していると述べている⁷⁾。飯野の研究はアフォーダンス理論に言及しているものではないが、保育者がどのような環境を構成するかは、保育者が自身の経験から物の可能性を考慮し環境を構成していたことが伺える。上村(2017)は幼稚園教諭としての経験年数によって保育環境を構成するための教師の視点がどのようなものか調査を行っている。彼は平均経験年数や分散をもとに保育経験年数低群(1~5年目)、中群(6~10年目)、高群(11年目以上)に分け、教師の視点について次のように分析している。「子どもの内的世界への視点」と「教師の意図性の視点」は教師の経験年数に関わらず視点として有しているおり、経験年数が少ない教師は子

どもの基礎的理解の視点などから保育環境を構成していくものの、経験年数が増えるにつれて、「園生活の背景の視点」や「子どもの内的安定感の視点」というように、目に見えない子どもの生活背景や深い心情などの視点をもち多角的に子ども見つけ、環境を構成しようとしている。さらに保育環境を構成する際の教師の具体的配慮として、「物的環境構成と精選・再構成の配慮」・「空間的環境構成の配慮」・「人的環境構成の配慮」が各群において共通しており、経験年数が増えるにつれて、「子どもの創造や意欲を引き出す配慮」、「人的環境としての空間的・タイミング的な配慮」、「学び獲得への配慮」や「自然環境との出会い方の配慮」、「事前の教材研究と情報発信の配慮」、「子どもの内面への配慮」、「教師間連携の配慮」などが顕在化していると示している⁸⁾。

3) 環境の再構成と保育者の働きかけ

君岡(2016)は5歳児における作って遊ぶ活動に焦点を当てて、5歳児が試行錯誤し工夫しながら遊ぶためには、「過去のアイデアを思い起こさせ、新たなアイデアを生もうとする教師の言葉をかけるという援助」、「発想が広がるような教材の出し方」、「“やってみよう”と意欲が湧くようなモデルとしての教師を示す援助」が必要であると保育実践の中で述べている⁹⁾。佐藤(2014)もスノコ遊びの事例をもとに環境構成を変革するための要因として「子ども達が素材道具に独自の意味を見出すこと」、「保育者の適切な素材道具の準備」、「素材道具と遊びに対するリスクとハザードに対する意識変化」を挙げている¹⁰⁾。中山(2016)は3歳児を対象として思考力の芽生えを培うための環境と援助のあり方について、3歳児が興味をもってかかわる中で、何を感じ、何を考え、何を試そうとしているのかを理解することから、次に必要な環境構成や援助が見えてくるものであり、子ども理解なしに思考力の芽生えを培うことはできないとしている¹¹⁾。このように子どもの興味関心に沿いつつも適切な環境構成をするためには一定の技術が必要であるとわかる。子ども理解という保育の最も基本的な事柄の他に、吉田・森(2017)は、数学的に豊かな遊びを目指す場合の子どもの活動を再構成することの難しさについて、「数学的な視点で活動を

捉えようとするが、刻々と変わっていく子どもの活動から、数学的な気づきを瞬時に言葉で表出することが難しい」、「数学的な視点で活動が見えているが、子どもたちが自発的に活動している場合、どこまで見守って、どこで声かけをすべきかその要所が掴みにくい」といった二点を挙げている¹²⁾。環境の再構成を行う際の難しさは他にもある。木村(2015)は、環境構成を巡る保育者の考え方の相違によって子どもの経験が異なることを示している。『到達目標を組み入れる保育の実際は、一歩間違えれば「自発的に見せかける」感化教育に至る可能性を有している。そこでの子どもの遊びや活動は到達点を保育者に依存する傾向が強くなる。その結果、子どもは自ら達成感や失敗からの反省を得られなくなり、「自らが意図した結果に至ったかどうか」という視点で振り返らなくなる』と述べ、そうならないためには、『過去の一つひとつの出来事が現在にどのような意義を有するかを連続的に解釈することである。たとえ、失敗に終始した出来事であっても、そこから役立つ教訓を見いだすのである。』としている¹³⁾。

また、高杉(2011)は子どもの興味関心を探り、一人ひとりの育ちに応じ、遊びの中で空間を生かして共に環境をつくる姿勢が保育者に求められているということを述べつつ、子どもの遊びの多様性や複雑性から偶然をきっかけとした援助の重要性も指摘している¹⁴⁾。

2. 研究の目的

保育者は幼児教育の実践の現場で常に環境の再構成とそれに伴う援助が求められている。仮に幼児理解が十分に行えていたとしても、子どもが環境に対してどのようなアフォードをするのかは未知の領域といえる。保育者が子どもの興味関心や一人一人の発達を踏まえ準備した環境の中で子どもが予想を超えた活動をした場合、子どもの主体性を尊重した保育を実践するためには、基本的には子どもの安全が脅かされない場合を除いて、保育者はその子どもの活動を見守りつつ、環境の再構成について思考を巡らせることが想定できる。この時の思考が保育者の実践知に基づいて行われている可能性を捉え、どのような判断に基づき、その環境の再構成がおこなわ

れていたのかを明らかにすることを目的とする。環境の再構成をすることは、再構成することを予め見据えて必要な時に再構成をすることと、保育者の想像を超える子どもの姿や発想から環境構成を余儀なくされる場合がある。本研究では後者と対象とする。

また、保育の環境を構成する際には、子どもの興味関心に沿った活動と保育者としてどのようなものを経験させたいか、身に付けさせたいかといったねらいとのバランスが求められる。このバランスが再構成の際にはどのようになるのかについても明らかにしたい。

I 研究の対象

後述するが、当初インタビュー調査による実践知の読み解きを検討していたが、コロナ禍の影響により現場訪問が困難となり、自由記述による質問紙調査を実施している。対象は、本学の位置する島根県内の保育所・幼稚園・認定こども園で保育者として従事する実践者とする。どのような保育や幼児教育を展開しているのかは、その施設の目指す理念や考えによって一定変化する可能性がある。本研究は、あくまでも保育者の実践知を読み解くことを目的としていることから、私立の施設は含まず公立施設のみを対象とした。

II 研究方法

1. 調査の内容と回答者

調査は2020年8月5日～2020年9月7日の間に、島根県のホームページ「県内保育所一覧」¹⁵⁾「島根県認定こども園一覧(市町村別)」¹⁶⁾「教育・保育情報の公表(公立幼稚園)」¹⁷⁾に記載されている各一覧から公立施設のみを対象として実施した。一覧の中で既に休園している園を除いて、保育所50施設、幼稚園60施設、認定こども園23施設を対象に実施した。

調査への回答は、保育・幼児教育の現場において実際に子どもと関わり保育実践を展開している職員に求めた。

2. 調査方法

調査は質問紙調査法によって実施した。回答について、選択式とした場合、特に経験年数の少ない保

育者の回答が選択肢によって影響を受けることの懸念があり、自由記述式で回答を求めた。そのため、回収率の大幅な低下や予期せぬ回答が増加することが予見された。また、通常の保育実践をする中で回答を依頼するものであり、多忙なため十分な回答が得られない可能性も考慮して、一つの施設に対して複数枚の質問紙を送付した。尚、質問紙は『質問紙デザインの技法(2016)』¹⁸⁾に倣い作成し、希望者に対してのみ調査の結果をE-mailで伝えることにした。

3. 質問項目

全ての回答者を対象として実施した質問項目は以下の通り。

質問 1 保育者としての経験年数と現在の職位を記入してください。

質問 2 あなたが子どもを対象として環境を構成する際に重視している視点を教えてください。

以降は、子どもの環境への関わりを通して保育者の予想を超えた経験について記述していただいた人のみ回答していただいている。

質問 3 子どもが環境に関わる中で、あなたにとって想定外の出来事が発生した経験について最も印象的な出来事について教えてください。

質問 4 「質問3」について当時のあなたの保育者としての経験年数を教えてください。

質問 5 「質問3」の出来事に遭遇した時、あなたは子どもや周囲の環境にどのような働きかけを行いましたか。「見守る」という行為も含めて、具体的に記述してください。

質問 6 「質問5」の働きかけを実施すると判断した理由を教えてください。

4. データの分析方法

環境構成の際に重視する視点、想定外の出来事の内容はカテゴリごとに分類し、その内容を表とグラフに示した。想定外の出来事との遭遇時期につい

ては保育経験年数低群(1~5年目)、中群(6~10年目)、高群(11年目以上)に分け、その件数を示した。想定外の出来事が発生したときの対応については表にまとめ、その判断については、客観的かつ計量的に把握を行うために、テキストマイニングの手法を採用した。本研究において、テキストマイニングの分析プログラムとして KH Coder Ver.3¹⁹⁾を用いた。

分析の手続きとして、自由記述データを Excel データ化し、データの有無を確認するために前処理を行った。強制抽出語や使用しない語の指定は行わなかった。分析手法として、共起ネットワーク分析を実施した。共起ネットワークは語句の関連性を分析するもので、出現パターンの似通った語を線で結び、ネットワークを描いたものである。Jaccard 係数で測定した共起の程度に応じ、強い共起関係ほど太い線で描画される。またバブルプロットの円の面積は、語の出現回数と比例する。

5. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、依頼文および質問紙に研究の趣旨や個人情報の遵守を明記し、調査用紙の回答をもって、調査参加への同意を行ったと見なした。また、質問紙はすべて整理番号に従って処理し、個々の施設や個人が判別できないように配慮した。

III 結果

質問紙を送付した結果、70 施設から回答があり、52.6%の回収率であった。その中で、保育所からは 114 名、認定こども園からは 67 名、幼稚園は 97 名の方から回答を得た。

1. 回答者の主な職位

回答者の職位について、園長や副園長、教頭などの管理職が 23 名、主幹教諭や主任保育士またはそれに準ずる保育現場のリーダーとしての役割を担う者が 49 名、それ以外の者が 206 名であった。

2. 環境構成の際に重視する視点

ここでは得られたデータを、上村(2017)を参考に、「子どもの内的世界の視点」、「保育者の意図性の視点」「子どもの基礎的理解に関する視点」、「園生活の

背景の視点」、「子どもの内的安定感の視点」のカテゴリーに分類した尚、上村は幼稚園教諭を対象としているので、「教師」と表記しているが、本研究は保育所、幼稚園、認定こども園を対象としているので、ここでは「保育者」と表記する。また、どのカテゴリーにも該当しないため「保育者の内的安定性の視点」を追加している。「子どもの内的世界の視点」では、遊びや活動への興味関心、夢中になるかどうかなど遊びや活動を通して生まれる子どもの心情に注目している視点として分類した。記述例として「生活や遊びの中で子ども達が自発的に気付ける」、「遊びを楽しめるか」、「子どもの興味関心に沿っているか」等がある。「保育者の意図性の視点」では遊びへの展望や子どもに経験させたい、身に付けさせたい内容について注目している視点として分類した。記述例には「ねらいが達成できるように」、「自然を感じたり、関わったりできるように」等がある。「子どもの基礎的理解に関する視点」は発達過程や年齢・月齢など子どもの属性に関わる内容や動線など子ども理解に必要な内容に注目している視点として分類した。記述例には「子どもの発達や年齢」、「子どもの特性」、「クラスの様子」、「動線」などが挙げられた。「園生活の背景の視点」では子どもの生活や生活への安全性、安心感、快適性といった内容に注目している視点として分類した。記述例には「危険のない安全な環境」、「安心できる保育者、友達、地域の人々の存在」、「快適に過ごすことのできる室温や湿度、換気」等がある。「子どもの内的世界の安定感の視点」は個々の子どもの心的な安定性に注目した視点として分類し、記述例には「安心感を与える保育者の態度や言葉かけ」、「集団生活への慣れ」などが挙げられた。最後に「保育者の内的安定性の視点」は保育者の心的な安定性に注目した視点として分類した。記述例には「自分自身がゆとりをもつ」、「自分自身が笑顔でいる」等がある。これらの分類に基づいて、抽出したデータの件数を保育所、幼稚園、認定こども園ごとに表 1 と図 1 にまとめた。

各施設を比較すると、図 1 の通り、グラフの形は似通ったものになっているが、「保育者の意図性の視点」や「園生活の背景の視点」は施設ごとの違いがやや見られた。

表1 施設種別ごとに見た環境構成において重視する視点

カテゴリー	保育所 (N=114)		幼稚園 (N=97)		認定こども園 (N=67)	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
子どもの内的世界の視点	70	61.4%	79	81.4%	48	71.6%
保育者の意図性の視点	20	17.5%	42	43.2%	16	23.8%
子どもの基礎的理解の視点	49	42.9%	48	49.4%	25	37.3%
園生活の背景の視点	75	65.7%	36	37.1%	33	49.2%
子どもの内的安定性の視点	10	8.7%	5	5.1%	5	7.4%
保育者の内的安定性の視点	4	3.5%	0	0%	0	0%

(小数第2位以下、切り捨て)

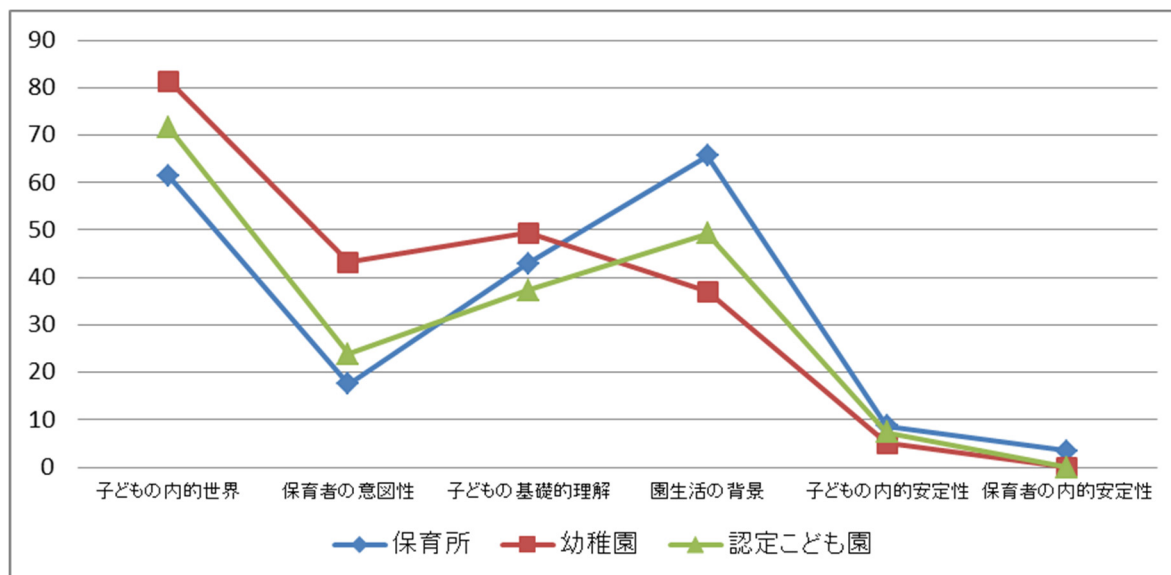


図1 施設種別ごとに見た環境構成において重視する視点

3. 想定外の出来事の内容

年数は保育経験年数によって、低群(1～5年目)、中群(6～10年目)、高群(11年目以上)に分類した。質問紙の回答欄には「子どもは常に想定外の動きや発想をするものなので、印象に残っている出来事を記述することが難しい」「たくさんありすぎて書けない」といった記述があった。「質問3」以降を回答しているのは全278名の内、133名の回答であったが、子どもに関して想定外の出来事に出くわしたことの無い人はほとんどいないと推測できる。実際に起こった出来事について、過去の出来事を思い起こして質問をしているため、どの施設での経験であったのかは判別できない。そこで133名の保育者

が想定外の出来事を思い起こした際に、それに出くわした時期を確認すると、低群(1～5年目)では62名、中群(6～10年目)では30名、高群(11年目以上)では41名とあり、想定外の出来事はどの程度の保育経験年数であっても出くわすものであると読み取れる。但し、この質問に対する想定外の出来事について、回答では大きく分けて、遊びや活動の中で子どもの発想や考えが保育者の予想を上回るまたは別の視点からのものであったという場合とヒヤリ・ハットのように突発的な事象によって事故につながる恐れがあったものまたは実際に事故に繋がったもの、特別な支援を要する児童に関するものとは分類できる。本研究では、想定外の出来事に遭遇した場合にどの

ような判断のもとで環境の再構成を行うのかということをも目的としている。事故に対する判断は、回答から「該当の児童や他の児童の安全確保のため」や「保護者に説明するため」など、判断基準が各施設でマニュアル化されているものに基づいて判断・対応しているというものであった。また特別な支援を要する児童への対応・判断も同様である。そこで、このヒヤリ・ハット事例と特別な支援を要する児童への対応・判断の事例を除いて、子どもの発想や考えが保育者の予想を上回ったり、まったく別の視点からの発想が見られたりした回答にのみ焦点を絞ると、低群(1～5年目)では47名、中群(6～10年目)では7名、高群(11年目以上)では40名であり、子どもの発想や行動が保育者を上回るのは常であることが読み取れる。尚、以降はこの94名の回答に焦点を絞るが、質問5または質問6が無回答のものは対象から外し、残り85名の回答を対象として述べていく。

4. 環境の再構成を要する場合の対応

想定外の出来事について、その内容を「想定していた用途とは異なる方法での遊び・活動の発見」、「保育者の予想を超えた子どもの姿」、その子どもの姿を土台とした「保育者の予想を超えた遊びや活動の発展」、「保育者の予想を超えた遊びや活動の収束」、天気の変化等による「自然現象に伴う偶然の発見」の5つに分類した。それぞれの想定外の出来事について、以下の通り紹介する。

1) 想定していた用途とは異なる方法での遊び・活動の発見

【出来事の内容】

園庭の築山の斜面に長い段ボールを敷き、滑り台のような遊びをしていた。遊んでいるうちに、段ボールが2つに分かれ、もう1つの段ボールに飛び移る遊びに変わった。そして飛び移った時、サーフィンを楽しむような感じで段ボールごと滑って楽しみ始めた。飛び移れるよう、勢いよく跳んで楽しんだ。

【その時の対応】

子ども達に対し、段ボールに飛び移り、滑った時の嬉しそうな表情に「すごいね」「かっこいいね」な

どと声をかけた。

このカテゴリーに位置する事例は8件ある。一つの事例では複数の対応が見られるのだが、その中で見られる対応は多い順に「声をかける(4件)」「見守る(3件)」、「一緒に楽しむ(2件)」、「子どものイメージを実現するために話し合う(1件)」であった。「声かけ」はその事例によって意図は異なるが、今回の回答では「子どもを称える目的」、「最小限の助言を行う目的」、「子どものイメージを創る目的」であった。

2) 保育者の予想を超えた子どもの姿

【出来事の内容】

釣り竿を作ってザリガニ釣りに行った際、雨が降ってきた。釣り竿の材料は子ども達の見つけてきたもので作ったため、雨で釣り竿がボロボロになってしまった子がいた。池の近くに落ちていた棒に釣り糸を結び直す子どもの姿が見られた。

【その時の対応】

釣り竿が壊れてしまって悲しい気持ちに寄り添い、「まだ釣りたい」という子どもの思いが実現するように一緒に考え、「他に使えそうにないものはないか」と声をかけたところ、池の近くに落ちていた木の枝を見つけ、釣り糸を結び直す子どもの姿を認めていった。

このカテゴリーに位置する事例は35件ある。その時の対応について多い順に、「一緒に楽しむ(11件)」、「子どもの発想を認める(10件)」、「子どもの思いを実現するために道具を準備する(8件)」、「見守る(8件)」、「他の子どもの意欲を尋ねる(5件)」、「子どもの気づきを待つ(2件)」、「遊ぶ方法を子どもと一緒に考える(2件)」であった。最も多かった「一緒に遊ぶ」のうち、4件は保育者がその後の危険性を予測し、安全を確保した(道具を変えたり、場所を変えたりした)上で、「一緒に楽しむ」という対応をしている。

3) 保育者の予想を超えた遊びや活動の発展

【出来事の内容】

子どもが「3匹のやぎのがらがらどん」に興味を

もち、一本橋を落ちないように渡る遊びを楽しんだ。橋の下にトロール役の子どもや教師がいて、驚かせて楽しんだりしていた。教師が、子ども達がより遊びを楽しんだり、「がらがらどん」のイメージを持ったりできるように段ボールでトロールを作り、橋の横に立てかけた。すると子ども達は橋を渡る子どもを驚かせるためではなく、チャイムをつけたり作ったごちそうを持ってきたりと「おうち」にして、トロールを遊びに取り入れていた。

【その時の対応】

橋のそばでなく、子ども達と一緒に場所を決め、そこで子ども達と「トロールのおうちでパーティー」を楽しんだ。子ども達が楽しんでいる世界に教師も入り、それに沿った声かけをしながらトロールの遊びが楽しめるように支えた。子ども達に誘い掛けるといよりは、自然と子ども達が集まる場になったため、その場が楽しくなるように声かけや関わりを考えていった。

このカテゴリーに位置する事例は 34 件ある。その時の対応について多い順に「見守る(16 件)」、「子どもの発想を認める(13 件)」、「遊びが充実するための道具の準備や提案(10 件)」、「一緒に楽しむ(8 件)」、「他児に面白さを伝える(5 件)」、「意欲を認める(4 件)」、「驚いた気持ちを伝える(2 件)」、「他児の仲立ちをする(1 件)」であった。

4) 保育者の予想を超えた遊びや活動の収束

【出来事の内容】

泥んこ遊びの際に、普段の遊びの様子から喜んで遊ぶであろう姿を想定していた子が予想外に拒否反応を示した。

【その時の対応】

言葉で誘うだけでなく、実施に保育者が泥んこで遊ぶ姿を見せることで、少しでもやってみようという気持ちになれるように働きかけた。嫌がる時は無理せず見守り、子どもの気持ちに寄り添いながら根気よく誘いかけてみるようにしている。

このカテゴリーに位置する事例は 4 件ある。その時の対応について多い順に、「遊びを提供する・楽しむ姿を見せる(3 件)」、「道具や教材を再検討する(2 件)」、「安心できる環境を作る(1 件)」であった。

5) 自然現象に伴う偶然

【出来事の内容】

外遊びの指導案がメインであったが、当日直前の雨。代案の「シャボン玉遊び」をした。1 階テラスでの遊びを考えていたが、保育途中で雨がやみ、子ども達は「雨やんだー」といそいそと園庭へ出て行ってしまった。

【その時の対応】

はじめは「みんな、屋根の下で遊ぼう」と声を何度もかけたが、まったく子どもの耳には届かず、諦めてどろどろになっている園庭でシャボン玉をすることになった。シャボン玉を用意していた机や台も園庭に移動させた。偶然、濡れた泥の上に落ちたシャボン玉が割れずに、泥の上に半球になってくっついた。そのことに気づき、「おもしろいね」「不思議だね」「なんで割れないんだろうね」などと子どもと共感しながら、そこらじゅうシャボン玉だらけにして不思議な空間を楽しんだ。また、その後、日差しが差してきたので、シャボン玉がよりキラキラひかり、「わあ、シャボン玉キラキラ」とシャボン玉の色や光に注目できるような声かけをした。

このカテゴリーに位置する事例は 4 件ある。その時の対応について多い順に、「声かけ(3 件)」、「見守る(2 件)」、「一緒に楽しむ(2 件)」、「意欲を認める(1 件)」で声かけはいずれも「楽しい気持ちに共感すること」を目的におくものであった。

5. 想定外の出来事に対する対応とその判断

5 つに分類した想定外の内容について、対応を判断した理由を KH Coder による分析を行い、その結果を図 2,3,4 に示す。「保育者の予想を超えた遊びや活動の収束」、「自然現象に伴う偶然」はデータ数が少ないため、KH Coder による分析は行っていない。

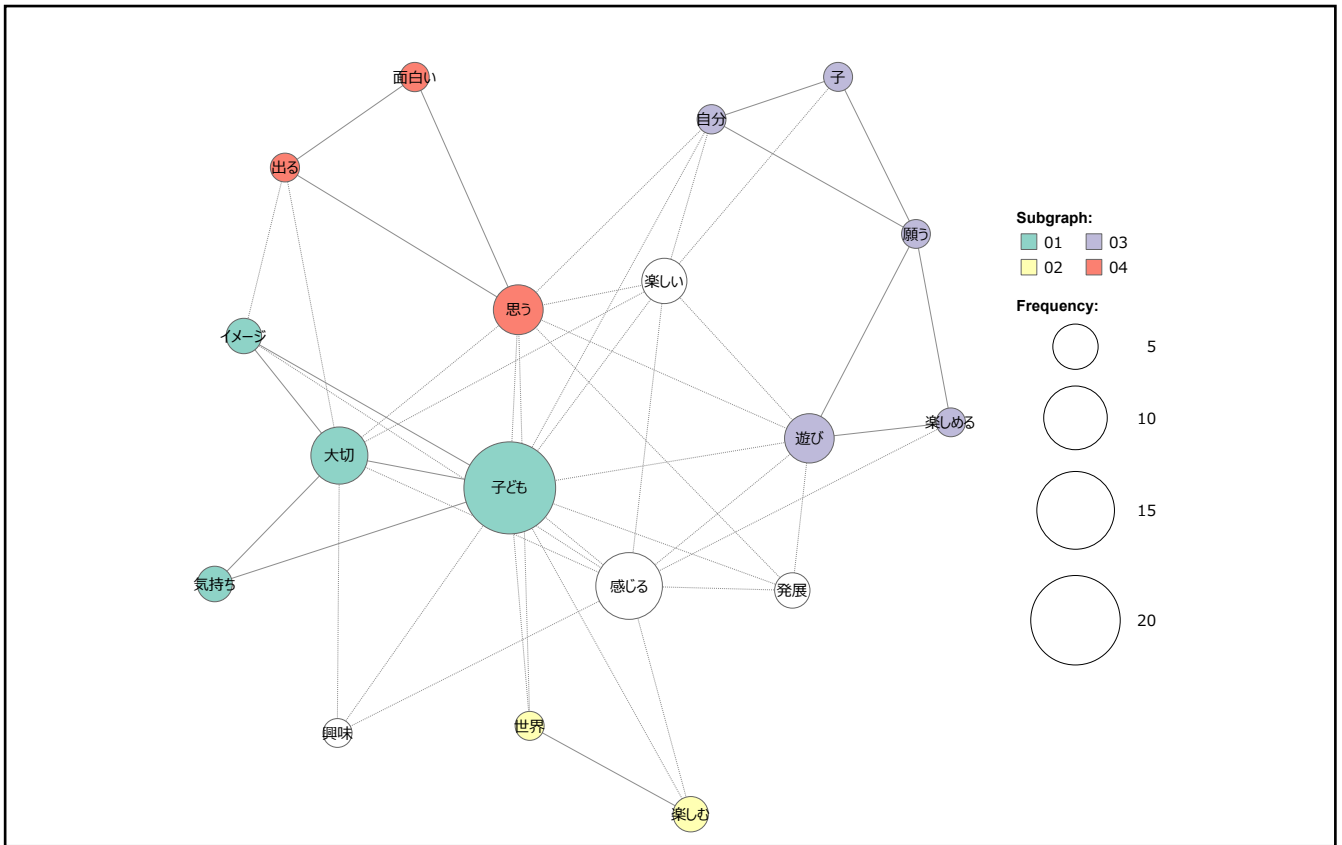


図5 保育者の予想を超えた遊びや活動の発展を発見した際の判断に関する共起ネットワーク

「保育者の予想を超えた遊びや活動の収束」の場面において、対応を判断した理由には、「少しでも安心して遊べると思ったから」、「子どもの心に届いていないと思ったため」、「遊びが発展するように視点を変えたかった」、「安心して遊べる環境を作りたかったから」、「子どものイメージを理解していなかったと気づいたため」があった。「自然現象に伴う偶然」の場面において、対応を判断した理由には、「他の保育者の思いに共感したから」、「子どもの楽しそうに遊ぶ姿や嬉しそうな表情を見たため」、「園庭で楽しんだ方が子どもの気持ちに寄り添えると思ったため」、「ねらいが達成できると思ったため」、「子どもとイメージを共有したかったから」、「さらに意欲的に遊べると感じたため」、「不思議な現象に興味を持っている子どもの姿からその子の学びの可能性が見えたから」があった。

IV 考察

1. 結果の分析

保育所、幼稚園、認定こども園で保育者として働

く職員に回答を求めたが、環境構成に関わる視点が施設によって大きな差があれば、その視点の差に基づいた考察が必要と感じ、保育所、幼稚園、認定こども園ごとに重視する視点をグラフで示したが、大きな差は見られなかった。しかし、前述している通り、保育所では「園生活の背景に関する視点」、幼稚園では「保育者の意図性に関する視点」が他の施設と比較すると割合が大きいと感じた。

まず、保育所についてだが、想定外の出来事の内ヒヤリ・ハットに関する内容を記述していた回答者は保育者では66名中41名(約62%)、認定こども園では27名中11名(約40%)、幼稚園では60名中10名(約17%)、となっており、この順は園生活の背景に関する視点の割合と一致する。また、回答者の中には「想定外の出来事という、ヒヤリ・ハットを思い起こしてしまいます」という記述もあり、特に幼稚園と比べると子どもの安心や安全について保育者が細心の注意を払っていることが伺える。但し、幼稚園において、子どもの安心、安全を保育者がいないがしろにしているものではないことは言うま

でもない。

次に、幼稚園において「保育者の意図性に関する視点」の割合が大きいことについてだが、環境を構成するにあたっては木村(2015)が述べているように、保育者の意図を保育実践の中に組み入れることで、感化教育になる危険性が生じる。そのため、子どもの興味関心、遊びや活動への没頭具合などと保育者の意図とのバランスを意識する必要がある。このバランスに注目した時、「子どもの内的世界に関する視点」と「保育者の意図性に関する視点」の両方を重視すると回答している回答者は、保育者の意図性に関する視点を大切にしている42名中38名(約90%)であり、決してそのバランスを軽視したことになっていないことがわかる。このことに関して、保育所では20名中15名(75%)、認定こども園では16名中10名(62%)と差はあるものの、いずれもバランスを意識しているものと考えられる。

以上のことから環境構成に関する視点は、今回回答を得たものについて施設の種別によって大きな差は無いということで想定外の出来事に対する対応や判断についての考察に移る。いずれの категорияにおいても一定数「楽しむ」という対応が見られた。回答者の回答から、子どもの発想に驚き純粋に楽しむ、子どもの発想を認めることを「楽しむ」という動きで表現しているといった様子がうかがえる。この一緒に楽しむ場合、子どもの発想は安全性を前提とせず、興味や関心、楽しさが最も優位に働いているため、保育者が瞬時にその危険性や安全性を見抜く力が求められると考えられる。また「見守る」という対応も見られたが、これは子どもの遊びや発見を大切にしたいという保育者の願いが伺える。保育者の意図も保育者は考えるだろうが、子どもの行動が予想を上回る場合、そこでのねらいは一旦どこかに置いておき、子どもの心情や心の動きと一緒に楽しむ、見守ることを大切にしていると感じる。

「保育者の予想を超えた遊びや活動の発展」にあるように、保育者はこの遊びの魅力を十分に充実させるために、その遊び自体に働きかけたり、遊びの魅力や自身の驚きを他児に伝え活動の範囲を広げようと試みたり、遊びのイメージを子ども同士で共有するために仲立ちをしたりする一方、一度子どもだ

けで十分に遊びを楽しむことができるようになるとその様子を見守ったりと、子どものまさに「今」から様々な役割を演じていることがわかる。また、必ずしも遊びは発展するわけではなく、時には保育者の意図や願いに反してしまう場合もある。今回の調査ではデータとしては少なかったものの保育者はその遊びの楽しさや魅力を伝えようとするために姿を見せたり、教材や道具を考え直したりと試行錯誤している姿が伺える。田中(2009)は幼児期のふさわしい生活の中で育つものを想定し、6つの段階に分類している²⁰⁾。田中の言うふさわしい生活には「物語やイメージの世界に存分にひたれる生活」や「興味関心の中に楽しさを見つける生活」などが含まれており、今回検討した事例でもこれと同様の活動を保障しようとする保育者の試みが見られた。これにより育つものは「自尊感情・他者との信頼感」、「安定した心情」、「想像力」、「充実感・満足感」、「自己実現の承認」、「自己表現の楽しさ」、「人のあたたかさに触れる喜び」など多様である。

環境の再構成時における子どもの興味関心と保育者のねらいとのバランスについてだが、環境構成において重視する視点として、いずれの保育者も半数以上がバランスを意識していた。しかし、再構成の判断においては共起ネットワークを見る限り保育者のねらいに基づく判断というものは実施されていない。全ての回答者の回答を見返したところ、「ねらいを達成するため」という判断はわずか1名のみであった。この1名もねらいを重視していたわけではなく、結果としてねらいとも結びつけられたというものであった。

2. 遊びや活動への保育者の願い

環境の再構成を判断する上で、保育者の意図に近い表現に「願い」というワードが見られた。環境構成における視点では「保育者の意図性」に関する事項が多く見られた場合でも、想定外の出来事に遭遇した際には、その意図性は薄れ、保育者の願いとして子どもへの関わり方に反映されているものと感じた。遊びを心の底から楽しんで欲しいという願いの他、共起ネットワークからは遊びの中や遊びを介することで、何かに気づいて欲しかったり、考えて

欲しかったり、感じて欲しかったりと遊びの中の学びを育む保育が実践されていることがわかる。活動の中では、子どもにとっては遊びを楽しみたいという願いがあり、保育者にとっては環境構成の段階で考えていたねらいを基礎として、子どもの活動の姿からねらいに基づく成長や変化を願うものとなっている。この願いを持つが故に保育者は願いを達成するために「見守る」や「声をかける」、「一緒に楽しむ」、「新たな素材を準備する」といった行動に移っていると考えられる。この時、子どもの主体的な活動と環境から学ぶ機会が保障され、子どもは学びを得る絶好のチャンスとなるのではないかと考える。そのため、この願いは保育のねらいとも読み替えることもできる。

3. 今後の課題

1) 調査方法の限界

今回は質問紙調査法による自由記述の回答から保育者の実践知を読み解くことを試みた。自由記述になることで回答者数の減少は予測していたもの予想以上に多くのデータを得ることができた。しかし、その時の対応や判断のあり様を追求することは困難であった。大勢の保育者が子どもの姿に日々驚かされ、環境の再構成を余儀なくされていることを想像すると、様々な保育者のインタビュー調査によって取り組みの実践事例を丁寧に分析することで、今回の調査のような実践知を一般化することに結びついていくと感じる。

2) 子どもの発想とアフォーダンス

子どもは常に保育者の想像の上を行く。それは今回の調査からも明らかであった。そのため子どもの行動を予測することは困難であるが子どもが環境からどのような情報をアフォードしているのかということについては、子どもを理解し、環境構成を行うためにも決して意味のないことではないと考える。今回の回答の中でも、「段ボールサーフィンのように滑る」、「集合するためにテープで作った円い印一相撲の土俵」、「雨の中の傘テント」といった具合に子どもが環境から様々なアフォーダンスしていることがわかる。このアフォーダンス理論に注目して環境

を捉えることは、教材研究にもつながるものであり、今後取り組んでいきたいテーマと考える。

V 結論

以上のように想定外の出来事に遭遇した場合、保育者は子どもの楽しむ気持ちを第一に考えており、そこには保育者の意図が入ることは少ない。しかし、結果として最初に環境を構成する際に、保育者の意図を明確にすることで、その場面で遭遇した瞬間にそのねらいに少しでも近づけようと、それでいて子どもには悟られないように完全に裏方の役割をこなすことができると考える。さらに「一緒に楽しむ」ということは子どもの発想や興味を尊重しての行動である。つまり保育者が介入したとしても遊びの主役はその子どもであり、保育者はあくまでも子どもと一緒に遊ぶメンバーの一人でありわき役でもある。この「一緒に楽しむ」という行動が何よりも子どもの主体的な活動を支える際に重要な役割を果たしていると考えられる。子ども自身が自身の発想に基づく遊びに保育者が共感してくれているという実感、その遊びを一緒に楽しんでいるという実感、さらにその遊びを保育者が他児や周囲に伝えようとする姿を見ることで子どもは自身の行動が環境に与える影響を実感し、自己効力感を始めとした様々な育ちとそれらの経験を積み重ねることによって、活動への向上心につながり、小学校教育の土台としての機能を果たすものと考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたって、アンケートの回答にご協力いただいた保育所、幼稚園、認定こども園の保育者の方々に厚くお礼を申し上げ、感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 「新幼稚園教育要領のポイント」, 『文部科学省ホームページ』,
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf, (2020.2.4).
- 2) 伊藤能之, 「現象学における環境のとらえ方に関する

- 考察』『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』, 19, 2019, 267-280.
- 3) 原子純, 「子どもの遊びの創造: 遊びの環境を視点として」『尚美学園大学総合政策論集』, (19), 2014, 77-89.
- 4) 長江美津子・伊藤博美, 「子どもの育ちを支える環境構成の在り方: A市の保育士研修の振り返りを通して」『名古屋経済大学教職支援室報』, 1, 2018, 157-168.
- 5) 田中裕子, 「幼児の主體的な遊びを育む保育者の関わりと援助ー環境構成から考えるー」『鈴鹿大学・鈴鹿短期大学部紀要 人文科学・社会科学編』, 第3号, 2020, 121-140.
- 6) 竹内勝哉・柳澤弘樹・堀昌浩・坂本喜一郎・井量昭, 「子どもの主体性を育む保育に関する研究」『保育学研究』, 第8巻, 2017, 93-112.
- 7) 飯野祐樹, 「積雪期における園庭の環境構成に関する研究ー保育所保育士に対する質問紙調査からの分析ー」『兵庫教育大学研究紀要』, (56), 2020, 13-20.
- 8) 上村晶, 「教育実践をデザインする幼稚園教諭の視点と役割ー教師の経験年数に伴う計画的及び協働的な環境のあり方に着目してー」『桜花学園大学保育学部研究紀要』, 16, 2017, 45-63.
- 9) 君岡智央, 「試行錯誤し工夫しながら遊ぶための環境・援助とは: 5歳児における作って遊ぶ活動に焦点をあてて」『広島大学附属三原学校園研究紀要』, (6), 2016, 45-50.
- 10) 佐藤嘉代子, 「素材道具と関わる園庭遊びの生成と変容: 保育園 5歳児クラスにおけるスノコ遊びの事例から」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』, 2, 2014, 33-43.
- 11) 中山芙充子, 「思考力の芽生えを培うための環境・援助のあり方とは: 感じ、考え、試す 3歳児の姿から」『広島大学附属三原学校園研究紀要』, (6), 2016, 25-32.
- 12) 吉田明史・森美里, 「幼児の活動を数学的な活動にする環境構成」『奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要』, 48, 2017, 97-110.
- 13) 木村光男, 「保育における環境構成と経験について: 子どもはどのような意味を得るのか」『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』, (16), 2015, 99-103.
- 14) 森上史朗・渡辺英則・大豆生田啓友, 『新・保育講座⑥保育方法・指導法の研究』, ミネルヴァ書房, 2017, p33-51.
- 15) 「県内保育所一覧」, 『島根県ホームページ』, <https://www.pref.shimane.lg.jp/education/syoushika/kosodate/hoikusho/hoikusho.html>, (2020.6.23).
- 16) 「島根県認定こども園一覧(市町村別)」, 『島根県ホームページ』, <https://www.pref.shimane.lg.jp/education/syoushika/kosodate/kodomoen/index.data/shichousonbetsu02.pdf>, (2020.6.23).
- 17) 「教育・保育情報の公表(公立幼稚園)」, 『島根県ホームページ』, https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/cARRIER/joho/kyoiku_hoiku_joho_kouritsu_yochien.html, (2020.6.23).
- 18) 鈴木淳子, 『質問紙デザインの技法 [第2版]』, ナカニシヤ出版, 2016.
- 19) 樋口耕一, 『社会調査のための計量テキスト分析』, ナカニシヤ出版, 2014.
- 20) 田中亨胤, 「幼児期におけるふさわしい園生活展開のカリキュラム装置ーストラテジー・パラダイム」『京都文教短期大学研究紀要』, 48, 2009, 65-70.

Reconstructing the Environment for Events that Exceed the Expectations of Childcare Worker —An Attempt to Decipher the Practical Knowledge of Childcare Workers from the Free Description based on a Questionnaire Survey Method —

Katata Hiroyuki*

Abstract

The purpose of this study is to clarify what kind of judgment is used to reconstruct the environment when a childcare worker witnesses a child who exceeds expectations. Questionnaires were distributed to childcare workers working in public nursery schools, kindergartens, and certified children's institutes in Shimane Prefecture, along with a measurement text. The events classified into five categories are "discovery of play / activity in a way different from the intended use", "children's appearance beyond the childcare worker's expectations", and "play / activity beyond the childcare worker's expectation", "development of children", "convergence of play and activities beyond the expectations of childcare workers", and "accidental discovery due to natural phenomena". It was concluded that childcare workers put the child's enjoyment first in the response to each event and the judgment at that time, and that the childcare worker's intention is rarely included. However, as a result, by clarifying the intentions of the caregiver when first constructing the environment, at the moment I encountered that scene and when I tried to get as close as possible to that aim, I thought I could play the role behind the scenes so the child would not realize it.

Key words: education through the environment, environmental composition, childcare workers, text analysis

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Katata Hiroyuki
〒690-0823 4280 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane Prefecture
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Welfare
E-mail : h.katata@kenko-fukushi.ac.jp